



今回は、忍術というものが平安期には密教と陰陽道とに結びつき、源平期には鞍馬八流という武術の様相を深め、鎌倉期になると戦闘が減少したため、中国伝来の「禅」の思想を取り入れ、武士の精神的鍛練、自己の肉体的鍛練の様相を帯びてきたことを述べてきた。

今回は南北朝期の忍術に触れてみようと思う。

1 鎌倉幕府はなぜ倒れたのか



鎌倉幕府の根幹は、将軍と御家人の間の『御恩と奉公』の関係で成り立っていた。中世の武士間の主従関係は、けっして片務的なものではなく、主人・従者が相互に利益を与え合う互恵の関係で成り立っていた。ここで主人が従者へ与えた利益を「御恩」といい従者が主人へ与えた利益を「奉公」といった。

この互恵的関係が成立したのは、源頼朝が幕府を創設した頃と云われている。以降「御恩」と「奉公」の関係性は、鎌倉幕府の成立の基盤として定着し続け、室町幕府や江戸幕府でもその成立基盤の真髓はおおよそ変わらなかったのである。

鎌倉幕府はなぜ倒れたのか、そのもっとも大きな原因は元寇であった。モンゴル帝国は漢語で「元」と云われ、「寇」とは外敵という意味で、モンゴルから敵が侵略してきたこと

を意味している。

幕府は国内の戦いでは、敵の領土を恩賞として与えることができたが、この蒙古襲来では西国の御家人に多大な負担と労力を強いたにもかかわらず、恩賞はほぼ皆無であったのである。これでは、西国の御家人の立場に立てば、多大な金銭と労力を費やしたのに恩賞が無いことに不満が噴出したのは当然のことである。「御恩と奉公」の根底が崩れ、御家人の幕府への忠誠心は崩壊していった。

このような情勢下、足利尊氏、新田義貞、楠木正成が立ちあがった。彼らは御家人の不満を糾合して後醍醐天皇を担ぎ上げ、討幕しようとしたのである。鎌倉幕府は滅亡。当然の成り行きであった。

2 建武の新政



鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇は「親政」(天皇が自ら行う政治)の政権を樹立した。しかし、この政権にも多々問題があった。

後醍醐天皇は朝廷の政治の復権を目指し、公家を重んじた政策をとったため、討幕に貢献した武士層は、何もしなかった公家優遇の親政に失望し、一層不満を募らせていった。この時討幕では同志であった足利尊氏は、西国の武士層の支持を取り付け、後醍醐天皇の親政と云わ

れる政権から離反した。新政権は楠木正成・新田義貞派と足利尊氏派に分裂し、足利尊氏は光明天皇(北朝・持明院統)を擁立した。これに対し後醍醐天皇(南朝・大覚寺統)は吉野にあって皇統の正統性を主張した。ここに南朝と北朝の両統の送立が発生し、御家人も南朝派、北朝派に分裂し、政権は機能を失い後醍醐天皇親政の政権は崩壊していったのである。

3 楠木正成は忍術の頭領であった



討幕に貢献した新田義貞は、楠木正成と同様、後醍醐天皇派として足利尊氏と戦ったが、箱根・湊川での合戦で敗北した。その後も奮戦したが、最期は越前藤島の戦いで戦死してしまう。戦況は一層、足利尊氏側に優勢となっていった。

この楠木正成は当時の河内の豪族であったが、当時までの朝廷の正史には記録として残されていない。このことは、楠木正成という土豪の存在は朝廷・公家にはまったく知られていなかった小物土豪であった証拠と判断してもいいだろう。楠木正成の出現は後醍醐天皇の時代からである。その理由は楠木家の生い立ちに関係している。

楠木家は河内地方の一小豪族であるが、その一族は賤民の長として古くから地方に勢力を張っていた。

源氏や平氏のようなエリート武士団ではなかったが、賤民を束ねる悪党と呼ばれた大和地方一帯に根を張った土豪であった。

楠木家はこれらの賤民を束ね、特殊な労役、職業等々の賦役を与え、貢税等を免除させる散所と云われる賤民集落を支配していた。この時代、散所は政情不安により賤民の流入が多く、集落は各地に大量に増加した。特に河内、和泉、伊賀、伊勢など大和地方一帯には多くの散所が形成され、一大勢力になっていた。

楠木正成の家は代々、その散所の賤民を統治する役目を持っていたのである。したがって楠木家自身は、伊賀の服部氏と同様、帰化人の末裔として文化程度も高く、地元の支持勢力を糾合し各地に支持基盤を増やしていった。この南北朝の時期には楠木家も武門化の傾向に傾注し、河内一帯の土豪間と頻繁に戦いをしていた。したがって、兵法に基づく戦いの経験は豊富にあった。

楠木正成自身は、幼少のころ当地の観音寺に預けられた。この観音寺は修験者が多く、修行のため武芸・兵法等が盛んに教練されていた。しかし楠木正成は、源義経と違って自らの肉体鍛錬をしたのではなく、将来武門の頭領として必要となる頭脳的兵法である諜報・防法・謀略・ゲリラ戦法の使い方、兵の動かし方等を学んでいったのである。これは自ら鍛錬で鞍馬八流を修得した源義経と違うところである。

源義経は「攻」を真髄とした奇兵法を忍術に取り入れた。一方、楠木

正成は兵法者として奇兵法は同じであるが「防」を真髄としたのである。これを「楠木流忍術」と云った。今では「源義経流忍術」と「楠木流忍術」が二大古流として伝わっている。この二大古流の違いは「源義経流忍術」が主に自らの戦闘に適用し、積極的であり奇手を主体とした忍術であるのに対し、「楠木流忍術」は自らの戦闘に適用するというよりも、むしろ平和時の忍術の使い方、その活用を主体として、実戦よりもっと広い政治体制の変革を目的にするほどの兵法としての広がりを見せている。

楠木正成が討幕に立ち上がったのも、多くの忍者からの情報の集積があり、世直しの必要性を感じていたのかもしれない。河内の小豪族が討幕という一大時代変革に、通常であれば関わることはできない。関わる情報すらないのが普通であろう。

楠木正成は多数の伊賀・甲賀忍者を家臣にしていた。特に直臣の四十八人衆は、諜報・謀略・ゲリラ戦において楠木正成の戦いに貢献した。楠木正成のような田舎の土豪が、鎌倉幕府の討幕、後醍醐天皇の親政に関わりを持てたのも、伊賀・甲賀忍者の諜報活動があったからである。楠木正成は、これらの忍者を透波（スッパ）と呼び、京・大阪・神戸に常駐させ、常にその情報を得ていた。そして“いざ”という事態に備え、その戦略・行動方法を練っていたと思われる。討幕時や足利尊氏との戦いの原動力は、このスッパの活躍に負うところが大きかったのである。現代でもスッパという言葉はよく使

われている。他人の秘密を公にすることを「スッパ抜く」と言うが、この語源は楠木正成の名づけからきている。

4 ちはや 千早城の戦い



楠木正成が忍者を活用したことによって、忍者の存在を大きく認知させた戦いがある。それが千早城の戦い（1333年）である。現在、大阪府千早赤坂村に位置する山城である。鎌倉幕府は、討幕を志す討幕派の一人として楠木正成を血祭りにあげようと、北条一族を主体とした幕府軍を編成し、楠木正成軍1,000人に対してほぼ100倍の10万人を動員した。この山城を包囲して力攻めで落城させようと進撃してきたのである。

正成は各地に放った忍者の情報を粒さに分析し、敵の兵力、士気、弾薬、攻撃通路、攻撃方法、食糧の確保状況等々をつかみ準備に入った。兵力差から判断し、山城を出て戦うよりも籠城戦を選んだ。この作戦をとった根拠は、彼の放った忍者の正確な情報がなければ決戦に勝てるという決断もできなかったであろう。敵は100倍の10万人である。通常なれば降伏するのが定石である。しかし正成は、他の武将とは違っていた。忍者の正確な情報をいろいろ駆使し、迎え撃つ準備は万全を期した。

まずは食糧の備蓄、水源の確保は念には念を入れた。山城のため当然ではあるが、敵は水源を絶ちにくる。持久戦になれば包囲して食糧の

南北朝の忍術と楠木正成

尽きるのを待つ作戦を取ってくるのは当たり前だからである。案の定、幕府軍は当初、やみくもに力攻めを仕掛けてきた。これに対し正成は、通常の合戦では考えられない作戦に出た。崖をよじ登ってくる幕府軍に対し、糞尿をぶっかけたのである。正成は各村から事前に糞尿を城内に大量に集めておいたのである。幕府軍は、顔や鎧に糞尿をかけられ戦いどころではなくなって、一斉に麓に退却した。楠木正成が悪党の頭領ならでの作戦である。

幕府軍は第二次の攻撃を仕掛けてきた。正成は大量にある糞尿を再度まき散らし、第二次、第三次の幕府軍に糞尿を浴びせかけ、一步も城に寄せ付けさせなかった。糞尿をぶっかけられた兵たちは、臭くて臭くて戦いにならなかったであろう。しかしながら敵は10万人を動員している。幕府の後方に控えていた新手の兵を繰り出してきた。ここで、幕府軍の前線部隊の少なくとも3万人程は戦線離脱をしたであろうが、正成軍の糞尿も尽きてきた。幕府軍は再度、

新手の軍を繰り出し力攻めを仕掛けてきた。

次に正成が取った戦法は、大小を問わず城内から石・丸太・小枝を球形にして火をつけ、火だるまにして、崖の上から大量に落とす作戦を取った。幕府軍は石や丸太の下敷きになって死んだり、焼け死んだ者が続出した。この状況を見た御家人は、続々と戦線を離脱して、自分の領国へ退却していった。幕府軍の指揮命令は崩壊していた。これにより幕府軍は3万以上の兵が死んだと思われる。正成軍はまったく無傷で、まったく武器も使わない大勝利であった。

この時点で、幕府軍はほぼ9割の兵が戦死したり、戦線を離脱したりしていた。そこで幕府軍も力攻めを諦めて包囲戦に切り替えた。そして正成は、水源を絶とうとしてきた幕府兵を、準備よろしく全て殲滅していった。また、事前に地元の百姓には食糧を与えぬよう隠させていた。これにより包囲している幕府軍が食糧不足になっていったのである。幕府軍の士気は乱れ、さらに戦線を離脱する御

家人が続出した。

とどめに正成が仕掛けた罠が、わら人形作戦である。正成は300体ほどのわら人形に鎧をつけさせ、槍、弓をもたせ、夜陰に紛れて城外に置かせたのである。早朝、正成は家臣全員に鬨の声を上げさせた。幕府軍は早朝の朝霧の中、奇襲されたと思い大混乱に陥った。ゲリラ戦の開始である。敵は指揮系統が崩壊しているため、思い思いに逃げ惑った。ここで伊賀・甲賀の忍者の頭目が物陰から地理勘を活かして大量の矢を放ち、幕府軍を戦線の離脱者を含めてほぼ全滅させたのである。

幕府軍は烏合の集団となり、自らの判断で自分の領国に引き上げていった。10万の幕府軍に、楠木正成はたったの1,000人で大勝利したのである。鎌倉幕府の権威は失墜し、執権北条高時は、ひとり鎌倉に取り残された。執権の権威などまったく通用しなかった。このとき、足利尊氏・新田義貞が鎌倉に攻め込んだが、執権北条高時は逃げて行方不明となり、鎌倉幕府はあっけなく滅亡した。

楠木正成がその後どのような運命をたどったのかは、読者に任せたい。こんなところにも、忍術が生きたエピソードがある。

〈参考文献〉

家村和幸「真説 楠木正成の生涯」宝島社
家村和幸「楠木正成を読む」並木書房
柘植久慶「逆撃 楠木正成 千早城攻防戦」中央公論社

(2018.11.5)

OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫



大阪府千早赤坂村にある千早城址。日本100名城に選定されている